

第4章 付 論

1 母牟礼城の堀切り・堅堀群とその歴史的 성격

海老澤 衷

I

最初に母牟礼城を踏査したのは、1984年7月のことであった。この時は大分県史の執筆のため、小野英治氏のご案内を得て弥生町側から西斜面を登って主郭に至った。とくに細かな遺構観察をすることを目的とするものではなく、中世史執筆の上で各地域の城郭を認識しておかなければならないというやや切迫した意識に基づくものであった。小野氏が執筆された『日本城郭大系16』（新人物往来社 1980年）の母牟礼城の項のコピーを手に懇切な解説を伺いながら頂上部を歩いたが、実はこの踏査が城郭研究の専門家の教えを実地に受けた初めての機会であった。80年4月に大分県教育庁に赴任した筆者は、宇佐風土記の丘歴史民俗資料館の勤務のかたわら、82年から三重町惣田遺跡・玖珠町伐株山遺跡の概報・報告書作成の手伝いをするうちに、荘園や中世村落の研究には城館調査が必須であることを再認識することとなったのである。84年12月荘園村落遺跡調査の一環として、資料館の真野和夫氏とともに豊後高田市烏帽子岳城の測量を行った。悪天候ではあったが、真野氏の指導のもと手際よく図面が作成され、85年3月刊行の概報『豊後国田染荘Ⅲ』に荘園村落遺跡調査としては初めて城郭の実測図を掲載することができた。84年の年末から85年の夏にかけて、すでに城館分布調査報告書を刊行していた熊本県の城郭を桑原憲彰氏・大田幸博氏の教示を得ながら20カ所程歩くことができ、この経験が『豊後国田染荘の調査』I・II刊行の一つのペースとなっている。

II

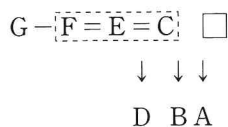
母牟礼城を最初に踏査してから、10年近い年月が経った。このあいだに城郭研究は長足な進歩を遂げている。70年代までは城郭研究者と埋蔵文化財担当者および文献史学の研究者とのあいだには、目立った組織的交流はなかったように思われるが、84年に第1回全国城郭研究者セミナーが開かれたのを一つの契機として、歴史学の新しい潮流が渦を巻くように展開し始めたのである。その軸にあったのが村田修三氏であり、戦国社会の研究を文献史学の立場から深め、さらに自ら城郭の縄張り調査を実践され、城郭研究の学術レベルを飛躍的に向上させた。村田氏は母牟礼城についても自ら調査され、『図説中世城郭事典』第3巻（新人物往来社、1987年）に執筆されている。このように城郭研究が進展するなかで、89年10月再び母牟礼城を踏査する機会を得た。今度は佐伯市の調査として行ったもので、空中写真測量図が作成されたことから詳細な検討が可能となった。ここでは発掘調査の際の呼称にしたがって堀切り・堅堀の存在する場所を主郭・曲輪2・曲輪3・曲輪4の各ゾーンに区分けして考察してみた。（第38図参照）

(1) 主郭ゾーンの堀切り・堅堀群

防御機能面から見た堀の関係を考えれば、先ず取り上げるべきはBとCである。この城で他に類を見ない見事な二重堀で東に伸びる尾根を切断している。B・Cがセット関係にあることは明らかであり、Dはこれを補助するものであるが、B・Cの規模に匹敵するものである。Cが北斜面に伸びる堅堀としての機能を有するのとは対称的に南斜面に伸びる堅堀としての機能を持っている。B・CとDとは同一の構想のもとに造られたものである可能性が高い。さらにEはDを補うためのものであるが、尾根の鞍部を避けて造成されている。堀切りAと堅堀Gはあわせて東の尾根に対する防御性を高めるものである。B・Cとは同時期・同一構想のものであろう。NにつづくI・J・Kは西に伸びる尾根を切断したものであるが、何れも規模の小さな堀切りで三つがセット関係に

→・↓は補助的・副次的な関係を示す

— 38 —



III

以上、堀切りと堅堀を中心として榑牟礼城の防御施設を考察してきたが、ここで遺構全体からその類型を抽出してみよう。

(α) 尾根の稜線を断ち切る堀切り

<例>主郭のA・E・I・J・K・L・N、曲輪4のG

(β) 堀切りに片側斜面の堅堀が連続する

<例>主郭のC・D・F、曲輪3のA・C・F、曲輪4のC・E・F

(γ) 堀切りに斜面の両側に堅堀が連続する

<例>主郭のB・M、曲輪3のD・E・G

(δ) α・β・γあるいは他の堅堀の補助としての役割を担う堅堀

<例>曲輪3のB・H・I・M・N、曲輪4のB・D

(ε) α・β・γから独立している堅堀

<例>主郭のH、曲輪3のJ・K・L

連郭式の山城の常としてαとγが重要な位置を占めることは言をまたないが、榑牟礼城の場合にはβがそれに劣らず、曲輪を守る要所に配置されている。β型については地勢的な必然性があったわけでもなく、このような意図と構想をもって意識的に造成したと考えざるを得ない。通路を確保するため片側に堅堀を設けなかったとも考えられるが、主郭におけるBとCとの関係を見るとβ・γを組み合わせることに意味があったといえる。

一般に山城の堀切り・堅堀の個々の正確な築造年代を判定することは難しいが、全体の構造を考察することによって築造の順序を推定することは可能である。榑牟礼城をめぐる軍事的緊張が高まったのは1527年（大永7）と1578年（天正6）～1586年（天正14）であり、堀切り・堅堀の大半はこの二つの時期に集中的に築造されたものであろう。前者は戦国大名大友義鑑に対する現地生え抜きの豪族佐伯惟治の謀反によるものとされる。大友氏の命を受けた臼杵長景が2万余の兵で榑牟礼城を攻めたが落城せず、謀略を用いて佐伯惟治を誅殺したと伝えられる。この時の榑牟礼城には佐伯氏の築城構想が反映していたと考えられる。

これに対して後者は強勢となった島津氏と大友氏の総力戦となったもので、日向耳川で大友氏が大敗した1578年以降、佐伯の地はしばしば島津氏の侵略を受けており、榑牟礼城は大友氏の重要な防衛拠点の一つであった。したがって、この時大友氏は佐伯惟定に命じて榑牟礼城の防衛施設を構築したもので、他地域の例からすれば、それは主に堅堀群の整備であったと考えられる（『城郭調査ハンドブック』P170、新人物往来社 1993年）。以上二つの時期をそれぞれ前期、後期として区別したい。

まず、前期であるが、発掘調査の結果から曲輪3がすでにこの時期使用されていたことが判明している。この曲輪の基本的縄張りはAとCの二つの堀切りであろう。このβ型の2条を基軸として、堀切りと組み合わせた小規模な堅堀Bがこの曲輪を構成する基本的な堀切り・堅堀群である。私はこれが大永年間の城主であった佐伯惟治の構想による縄張りであったと考える。この後、日向耳川の戦いのあった1578年以降に畝状空堀に近似したJ・K・Lのセットをなす堅堀群とD・E・F・Gの堀切り、I・H・M・Nの補助的な堅堀が築造されたものであろう。

次に主郭は堅堀が2条と特殊な構造を持つMがあるほかは、αまたはβ型の堀切りが主体であり、曲輪3で想定した大永年間の状況に近い。2条の堅堀のうち、Gは堀切りとセットになるもので、曲輪3にも見られるものである。したがって、城郭全体の中で北に位置する主郭の場合、後期にはほとんど新たな築造がなかったのでは

ないか（Mのみは後期の築造であろうが）。これは薩摩軍が樺牟礼城の南方に陣を構えたことと符合する。なお、主郭では西斜面の帯曲輪群が注目されるが、千田氏の指摘にあるように城兵の駐屯所と考えられる。テラスが尾根で囲われ、頂上部よりも強風を避けることができ、下部は急斜面となる最適の地である。大友氏と島津氏の総力戦となることを予想して天正6年以降に築造されたと考えるべきであろう。

曲輪4においては、曲輪3、主郭と同様な想定が許されるなら、C・E・Fの β 型堀切りが存在することから、前期に築造されたものであると考えられ、Gもこれらと緊密な関係にあり、A・B・Dも β 型堀切と有機的に関連している。小野英治氏の御教示によれば、大永7年の合戦を記した『大友興廃記』の「敵七ツ堀口へ打出る」（敵は佐伯惟治の軍勢を指す）とある「七ツ堀口」がこの地に相当する。確かにこの合戦に際しては曲輪4の尾根つづきである小田峯に大友氏の陣が張られている。小田峯を相城としているわけであるが、佐伯軍はこの尾根伝いに打って出て、大友軍を攻めたものであり、この地で激しい戦闘があったことは事実であろう。Gが樺牟礼城全体を見渡しても特異な位置にあるのはこのためであり、曲輪4の合計7つの堀切り・堅堀の中で、軍事的緊張が最も凝縮された場であったと考えられる。



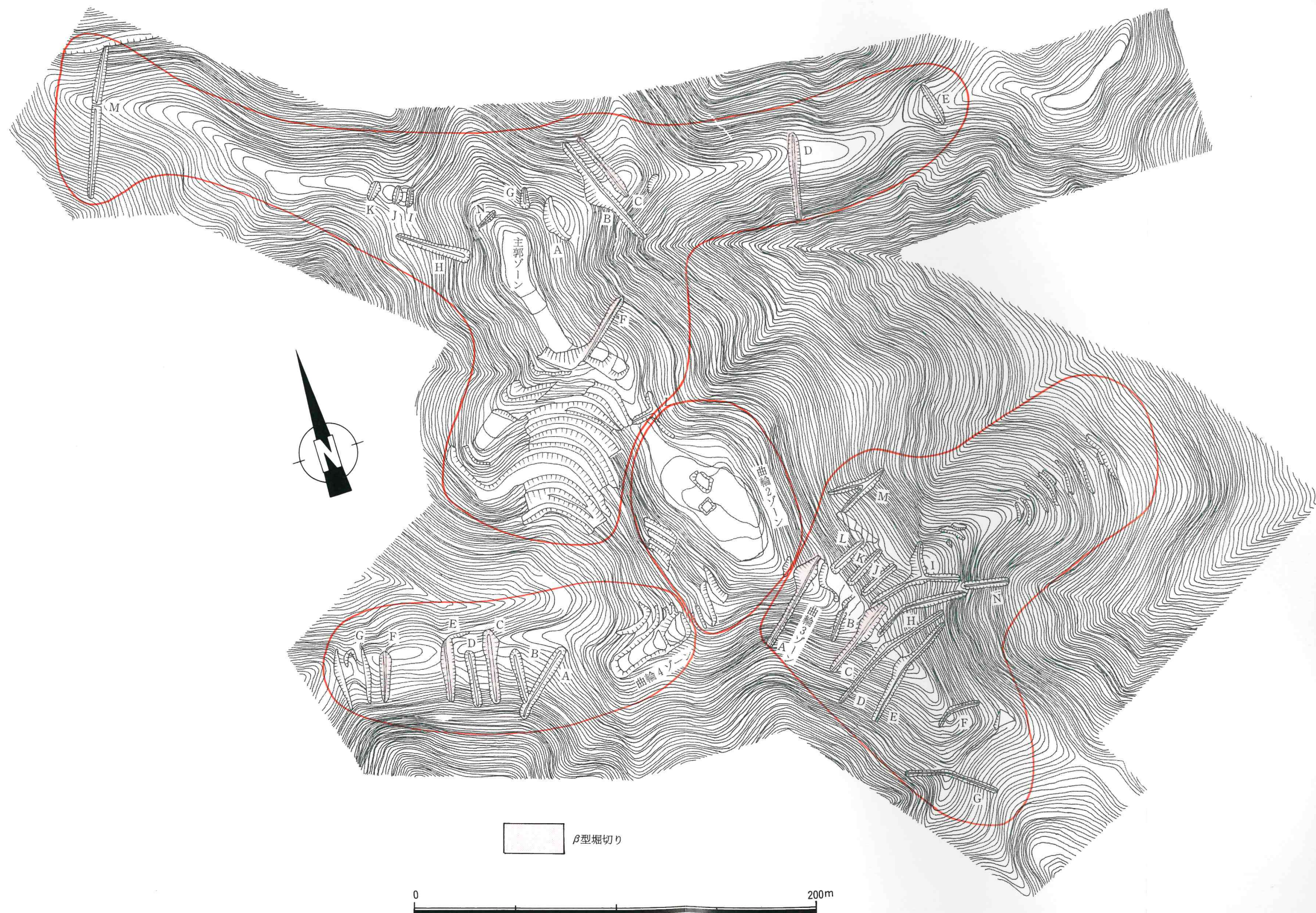
図版5 曲輪4ゾーンのG（七ツ堀口の大堀切り）



図版6 曲輪3ゾーンのC（曲輪3の下掘切り）

IV

以上細部にこだわった考察になってしまったが、発掘調査によって時期が明確となった曲輪3における β 型の堀切りを手がかりとして佐伯惟治が城主の時期を中心に樺牟礼城を復原してみた。 β 型堀切りを佐伯氏独自の築城構想によるものと断定するには、さらに豊後全体の中世城郭を検討していかなければならない。何れにしてもこのような考察が可能となったのは、空中写真測量図の作成と曲輪の発掘調査によるところが大きい。今回の調査によって、大永年間から天正年間にいたる築造状況がよくわかり、その後の改変がきわめて少ないという点で価値の高い城郭遺構であることが改めて確認されたといえるであろう。



第38図 柵牟礼城址堀切り・豎堀配置図